

MACF 礼拝説教要旨

2023年4月16日

「エマオへの道で」

～心が燃えるという出来事～

ルカによる福音書 24章

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、14 この一切の出来事について話し合っていた。

15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。

17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。

18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」

19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。

22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、23 遺体を見つせずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。24 仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。

31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。
32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わた
したちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

1) イエス様が一緒に歩いているのに気づかない二人

イエス様の十字架の出来事のあと、弟子たちは本当にショックを受け、落胆し、エル
サレムから逃げるような気持ちで「居場所」がないような気持ちだったに違いありま
せん。ここに出てくるふたりも同じです。彼らはエマオに向かいますが、道道、エル
サレムで起こった悲劇的事件について語り合っています。その理不尽さ、その残酷
さ、その絶望的なイエス様の最後。かれらは出来事を理解し、冷静に状況判断はして
います。しかし、そのふたりのところにイエス様が並び、歩きはじめ、語り始めます
が、彼らにはイエス様だとはわからなかったというのです。

人間的な不安と恐れ、理不尽さの中に閉じ込められている弟子たちの姿が浮かび上が
ります。つまり、単なる思い出や言葉の理屈としての理解は彼らを救うことができ
ていないのです。悲しみや絶望感は「勉強」では消えないということなのかもしれませ
ん。

イエス様に対して厳しく叱責している姿のなかに、なんとも言えない「悲しみによる
絶望感の大きさ」を感じます。

イエス様は、彼らに対して、ご自分のことを聖書の中から説明し始め、熱心に語りま
す。

話が止まらないような勢いで語っています。

弟子たちはイエス様に一緒に泊まることを勧め、一緒に夕食をとることになりまし
た。

2) イエス様の応答

夕食の席でイエス様はパンを取り、賛美をし、パンを裂いて弟子たちに渡しました。
その出来事の途中、二人の弟子たちの目が開かれ、イエス様だと気づくのですが、
そのときにはイエス様の姿は見えなくなりました。

二人は「よみがえられたイエス様」に出会っていたのですが、最後の晩餐を思い出さ
せるような夕食の現場で初めてそれに気づきました。

でもそのときにはイエス様の姿は見えなくなりました。

彼らの証言を聴いてみましょう。

「30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。 31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。 32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。」と書かれています。

つまり、彼らがイエス様だとわかった時、「最後の晩餐におけるパンの分与の記憶」とイエス様の聖書の説明のなかで「イエス様とわたし」について「感じとれるなにか」が

あったに違いありません。理屈で腑に落ちるというよりも、体験的に「あの出来事がわたしのための救いの道」だったのだ、そのためのイエス様の苦難だったのだと「気づいた」

「感じ取った」のです。その表現が「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」という告白です。

聖書の言葉が「ふと、自分に対する神さまからの言葉だ、神さまから自分への直接的なメッセージだ」と気づき、感じた時、それらの言葉はとても大切な意味を持ちます。客観的な事実としてではなく、主観的な、自分に対する言葉として心に飛び込んでくるからです。

聖書を読み、理解することは大切です。でも、その言葉にとどまって味わい思い巡らし、感じ取ることができると、更に深く神さまからの深い取り扱いを受けることになるようです。

短い箇所をゆっくり何度も読み返して、心に残る言葉をしっかり味わう必要があるでしょう。そのときに心に残るのは何故かなと思い巡らしたり、さらに深くその言葉と自分の出来事との関係を探ったりしてみるととても大事な要素があることに気付かされます。

この二人の弟子たちは、まさに「心の燃えるイエス様との出会い」「心の燃える聖書の言葉との出会い」を経験しているのです。それさえあれば直接イエス様にその場に現れてもらわなくても、イエス様の心が腑に落ちるのです。そして、そこでこそ信仰の深まり、人格の練り上げ、意欲の向上などが取り扱われることになるのだと思います。

**

MACF 礼拝の映像はこちらです。

<https://youtu.be/w13fdXfT-nl>

